ヨゼフ会便り

発行者　ヨゼフ会　横浜市中区山手町 44 番地 カトリック山手教会内
第 53 号　　2024 年 9 月 28 日発行

¶ 大塚国際美術館

磯子教会協力司祭
内藤 聡

昨年、ヨゼフ会便りの巻頭言を寄稿しましたが、今年も原稿の依頼があり、書かせていただきます。

今回、何を書こうか色々と考えていましたが、私は今年の夏にカトリックスカウトキャンポリーに参加するために、山手教会のボーイスカウト３４団と一緒に淡路島に行ってきました。

全国、世界から合わせて５００名程のカトリックスカウトが参加していました。キャンポリーの詳しいことは教会報「やまて」などで見ていただければと思います。

そのプログラムの一つとして、徳島県鳴門市にある大塚国際美術館に初めて行くことが出来ました。

美術館の中は地下３階から２階までの構造で、古代～現代まで続くものになっています。やはり、印象に残ったものとしては、入口を入ってすぐにあるシスティーナ礼拝堂天井画の陶板（レプリカ）であるシスティーナホールです。

私はバチカンでの本物は見たことないのですが、陶板の技術は素晴らしいものだと感じました。その天井画に描かれているものは、旧約聖書の「創世記」に描かれた「天地創造」の壮大な場面です。神が光と闇を造り、人類の男女を創造しますが、人類は神の意思に背いて堕落し、神は人類に「ノアの大洪水」の刑罰を与えました。それが天井中央の９場面であり、神と人類の壮大な物語が描かれています。その周りには「預言者」の名前や旧約聖書の物語などが描かれているというものです。

次にスクロヴェーニ礼拝堂も見ることが出来ました。もともとは、北イタリアの都市パドヴァにある小さな礼拝堂で、外観はシンプルなロマネスク・ゴシック様式の建物だそうですが、この内部に唯一無二の空間が広がっています。堂内を埋め尽くすのは、「西洋絵画の父」ジョットが手掛けたフレスコ画です。見上げると、鮮やかなブルーの天井と金色の星々が息をのむほど美しく、そこには荘厳さが描かれていました。

同時に注目すべきは、壁面に描かれた、怒りや悲しみをあらわにした人々の物語です。当代一の画家であったジョットは、それまでの様式的で平面的に

しか描かれなかった絵画に感情表現を盛り込み、イタリア・ルネサンスの扉を開きました。

礼拝堂のテーマは「救済」で、聖母マリアの慈愛に捧げられました。このフレスコ画には、聖母マリアとイエス・キリストの生涯を中心に螺旋を描くように展開されています。上段から下段へ、左から右へと時計回りに視線を進めていくというものです。

そして、「最後の晩餐」の修復前後もありました。最後の晩餐は従来、聖体の秘跡の儀式の象徴でしたが、レオナルドダヴィンチは悲劇に立ち会う人間の心のドラマとして描いたそうです。「この中にわたしを裏切る者がいる」というキリストの言葉を聞いて、１２人の使徒はさまざまな驚き方、悲しみ方をしています。キリストは静かな山のようなピラミッド型に描かれています。この「最後の晩餐」はダヴィンチの代表作というばかりでなく、西洋美術史上の最高傑作とも言われています。

しかし、この壁画の運命は悲惨なものとされています。１９７０年代までは、その芸術的価値もよくわからないほど暗くはっきりしていなかったこと、ダヴィンチらしくないタッチもあったそうです。

その損傷の理由としてダヴィンチが漆喰の壁にふさわしくないテンペラ（顔料に亜麻仁油と卵を混ぜたもの）で描いたこと、教会の食堂の壁に描かれたため湿気を絶えず吸収してしまったこと、１９４３年に空爆によって建物が破壊され大打撃を受けたことなどがあります。その後、修復作業が行われて汚れや加筆などが取り除かれていき、現在の修復までに至っているということです。

私自身は特に美術に関して得意とか専門ではありませんが、今回、こうした作品を通して普段とはまた違う方法でキリストに深く結びついていくことも出来るのだと感じるようになりました。

ミケランジェロやレオナルドダヴィンチ、その他多くの画家が聖書やキリストを描きながら、後世に何を残したかったのか。ただ素晴らしい美術品としてではなく、そこから信仰に一歩踏み込むことも出来るのだと思います。

今回、この大塚国際美術館に行ったスカウトの多くも信者ではない人がほとんどでしたが、スカウトそれぞれが興味を持ちながら、少しでもキリスト教に関心を持ち、信仰の道を進んでもらえればと願うばかりです。

¶健康診断

小倉 謙

コロナ禍２０２０年の健康診断の申込書に、コロナ禍ということもあったのか、血迷ったのかは覚えていませんが、普段はチェックを入れない「保健指導を受ける」にチェックを入れてしまいました。健康診断を受けてから数日後に毎年のように診断結果が送られてきて、いつものように BMI と血圧と総コレステロール値が高いとの診断結果でした。その後も普段通り特に気にすることもなく過ごしていたところ、ある日、中小企業が加入する協会けんぽという団体から会社に電話があり、健康診断の結果で基準値を外れている項目があるので病院で診てもらってくださいと言われました。また確認の電話をしますので必ず受診してくださいと言われたので、この位の年齢で一度くらい医者に診てもらうのも良いかなと思い、会社から一番近い内科を受診しました。

そこのお医者さんから BMI も血圧も総コレステロール値も薬を出す前に体重を減らして様子をみて

みますか？それとも薬で対処しますか？と言われ、これも良い機会だと思い体重を減らすことにしました。日本がコロナのワクチンの輸入に出遅れていた頃、高齢者、基礎疾患がある方、BMI３０以上の方がワクチンを優先的に受けられるという報道を聞いて、該当する数値には届いていませんでしたが肥満を含む基礎疾患がワクチンを優先してもらえるほどコロナに対して危険なんだという情報も体重を減らしてみようというきっかけになったような気もします。またそのお医者さんは消費カロリーが摂取カロリーを上回れば体重は落ちると簡単に言っていて、成人男性の一般的な一日の消費カロリーが2000kcal 位だから一日 2000kcal 以下の食事量にして、ウォーキングなどの有酸素運動をしてみたら、と言われました。それでも血圧が下がらなければ薬を飲むかどうか考えましょうとのことでしたので、とりあえず食事を腹八分程度にして、毎朝ウォーキングをすることにしました。

最初はウォーキングと称して毎朝近所を歩くことにしましたが、あまり運動になっていないと感じたので、通学で駅へ向かう女子高生の早歩きにも抜かれる程度の速度ではありますがジョギングをすることにしました。私は生まれ育ちが横浜の南区で、結婚して隣の磯子区に移り住み、山手教会に通い始めて３，４年が経った２０１３年から中区の本牧間門に住み始め、ジョギングを始めた２０２１年時点で中区にはすでに７，８年住んでいましたが、近所の道は特に詳しくなく、毎日決まった道しか通ることはありませんでした。医者から階段や坂の上り下りは結構効果があるよ、と言われていたので、ジョギングを始めてから車では通れない階段や細い道も通るようになり、家の周りの道に詳しくなってきました。そして何より朝から神父様や教会の方々とすれ違うことが増え、中区ってカトリック率高いなと思わされています。聖光のブラザーの朝ミサに来られる神父様、根岸森林公園で朝の散歩をされているご夫婦、犬の散歩途中にすれ違う方々、他にも私を見たという目撃情報を多数いただいています。

待降節の修道院

間門は駅からはあまり便利な場所ではないかもしれませんが、ものの５分程度で本牧市民公園や三渓園の裏門があったり、本牧山頂公園、根岸森林公園、少し足を延ばせば山手公園や港の見える丘公園など、ジョギングをするとなると飽きずに続けられる環境だったんだと思わされています。また自転車も有酸素運動になるということで、電動ではないクロスバイクを購入して、晴れているときはきつい坂をふたつ超えて教会に通うことにしました。週末には自転車で山下公園や赤レンガまで行って、みなとみらいをジョギングすることも日課になっています。

赤レンガの駐輪場

嬉しい（？）悲鳴として服のサイズが合わなくなったことが挙げられます。もう痩せることはないだろうと数年前に２０代の時に着ていた服をすべて処分してしまったのですが、今度はリバウンドをしない決意で大きいサイズをすべて処分してしまいました。また大きいサイズを必要とする日がくるかもしれませんが、今のところ３年くらいはキープできています。私の外観の変化に病気を心配されている方が多数いらっしゃるようでしたので、今回はこんな近況を書かせていただきました。

¶多文化共生
ー日本語で話し合うために

藤沼 護

朝ごみを捨てに行ったら、近所のスリランカの青年と出会い、ごみの出し方についてしばらく立ち話をしました。コンビニに行くと客の半分は外国人で、店員も皆外国人ということもよくあります。日常生活の中で日本人と外国人が共に暮らしているのはあたりまえの光景になっています。２０２４年６月の統計によれば横浜市には約１２万人の外国籍の人たちが住んでいて、横浜市の人口約３７７万人の 3.2%を占めています。外国籍の人の割合が多い中区では 11.6%を占めています。

在留外国人が増える中で「多文化共生」という言葉が国や自治体でよく使われるようになりました。総務省の多文化共生の推進に関する研究会の定義によれば、多文化共生とは「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共にいきていくこと」とされています。地域社会は多様な文化をもった多くの住民によって成りたっており、防犯、防災、教育、医療、福祉など課題が山積みです。行政が中心になって行うものが多い中で、私たち日本人ができる大切なことがあります。それは積極的に地域社会に住んでいる外国籍の人たちと話し合うことです。相手が何を考えているか分からないから話さないではなく、話し合わなければお互いに何を考えているか分からないから話すのです。話し合わなければ疑心暗鬼を生じさせることにもなりかねません。先ずは近所に住んでいる外国人に時候の挨拶でもいいので話しかけてみることが多文化共生への第一歩になると思っています。

けれど話し合うためには言葉の壁があります。日本で暮らしている外国人の方々も言葉の問題には強い関心をもっています。横浜市が行った「横浜市外国人意識調査」にこのような結果が載っています。「外国人が困っていることや心配なこと」として１位は日本語の不自由さ（29.8%）、２位は病気になった時の対応・病院で外国語が通じない（19.3%）、３位は自分または家族の健康（14.7%）、４位は災害時・緊急時の対応（14.6%）、５位は子どもの教育（14.5%）があげられています。ここには自分や家族の不自由な日本語への不安感が表れています。そして「外国人にとって暮らしやすい町にするために必要なこと」としては 45%の人が「外国人が日本語や日本文化を学ぶ機会を充実させてほしい」と答えています。横浜市は各地域の国際交流ラウンジを通して日本語教室の紹介を行うなどして、日本語が分かる外国人を増やす施策に取り組んでいます。

私たちは外国人と話すとき共通語は英語だと思いがちです。けれど横浜市には約１６０か国から来た外国人が住んでいます。共通の言語などは存在しません。そこで近所で出会った外国人と話すとき、日本語で話してみてはどうでしょうか。そして相手の人が日本語を少しでも話せると分ったら、話を聞く際の私たちの態度を工夫してみてはどうでしょうか。日本に住んでいるのだから日本人に分かる日本語を話すのは当然の務めだなどと相手にたいして尊大な態度をとらないことです。少ない語彙と文法知識しかなくても何とか話そうとする相手に、何を言っているのかよく分からないとコミュニケーションの回路を閉ざしたり、分かったふりをしないことです。相手の話す日本語がたどたどしく分かりづらくても、真剣に耳を傾け「やさしい日本語」で質問を返し、身振り、手振りを入れてでも分かり合おうとする私たちの態度から相互理解が生まれ、それが文化の異なる人々が地域社会の構成員として共に生きていく多文化共生へとつながっていくのではないかと思っています。

山手日本語教室「絆」は２００３年に設立され教会から教会ホール等をお借りして毎週土曜日午後３時から授業を行っています。「絆」では日本語の文法や語彙、日本文化に関する知識を一方的に教えるやり方をしていません。学習者たちは地域社会の中で

想定されるさまざまな場面での会話をくり返して聞き、話す練習をし、ロールプレイを行い、文化の違いなどを学びながら使える日本語の習得に励んでいます。皆さん、授業を見に来ませんか。学習者たちと話してみませんか。新しい発見がありますよ。

¶山手教会と私

山之城 金三

高校時代期末試験のあと、友人と山手界隈を散策した帰りにカトリック山手教会へ軽い気持ちで立ち寄ると木村義夫神父様とお会いし、しばらくお話を伺いました。ピンポンをしようと教会ホールで卓球をしばらくして紅茶とお菓子をご馳走になりました。

また来週ということで、その後金曜日の午後に訪問するようになりました。卓球や日頃のお話、そしてしばらくして、今はなんと呼んでいるのかわかりませんが公教要理の教室に入り勉強することになりました。そのうち青年会にも参加し、ある時鎌倉大町教会青年会の方々が山手教会を訪問され、懇親会をかねた卓球大会の試合で貴重な一勝をあげ、皆さんから喜ばれたのを覚えています。

それまでキリスト教のことなど学校で習った程度の知識しかなく何も知りませんでした。神父様からいろいろ質問されトンチンカンなことを答えていると笑われるばかりでした。「一番印象に残ることは？」の問いに「聖堂のキリスト像を見て、修学旅行にて長崎で見たキリスト像はほとんど磔刑の姿でありましたが、ここでは両手を拡げてお母さんが子供を迎えるような姿でいらっしゃいますね」と答えると「キリスト教で一番訴えたいことは“すべてを受け入れる心”です。そして“神様はすべてを聞いてくださる方です”と説明されました。

その時は、ハテ？特に聞いてほしい人生の悩みなどないしくらいに思っていましたが、その後勉強会や青年会に参加してゆくうちに理解も深まりクリスマスの深夜ミサの際に原俊神父様より洗礼を授かりました。当時は深夜ミサの後、教会ホールでお祝いの言葉を交わし、演芸や談笑、お茶会などで朝まで過ごしました。幼稚園で仮眠をとり朝一番の市電で雪の中を帰宅していったのもよい思い出です。

大学時代はカトリック学生連盟の活動に力を入れ山手教会の加藤忠男神父様、東京の沢田神父様、粕谷甲一神父様、井上洋治神父様の熱心な指導を受けキリスト教の理解も深まっていきました。

大学卒業後、世に言う企業戦士、サラリーマンとしての生活が始まる時、原俊神父様からキリスト者として、これからどのように生きていったらいいかを伺うと「社会的良心に従って生きてゆきなさい」と、はなむけの言葉をいただきました。

東京を皮切りに大阪、香港、英国の金融業界を嵐が吹き抜けるように歩いてきました。十数年間の海外勤務の後、原神父様を末吉町教会に訪ねお世話いただくことになりました。末吉町教会では新しい司祭館、信徒会館を建て替え盛り上がり、賑わっている頃でした。

多忙な原神父様からある時、土曜日の留守番をしてほしいとの依頼があり、教会に多種多様な相談事

で来る人や外国人の方々の対応のお手伝いをしておりましたが、原神父様は重い病で帰天されました。

その後松村神父様、ペレア神父様、バーク神父様小笠原神父様、梅村神父様(現司教様)が赴任されご指導を受け教会活動も大変活発になっていきました。

1994 年末吉町教会にて 濱尾文郎司教様(当時)とともに

そしてバブル期の終焉の頃に一念発起して社会福祉士、介護専門支援員の資格を得。福祉の世界に飛び込んだのは、介護保険制度が始まった２０００年、５０歳をすぎた時でした。某病院の福祉部門を任されることになり爾来、介護施設特別養護老人ホーム、グループホームを立ち上げ多忙を極めておりました。

７７歳の時になりますが、難病をいくつか発症してからは公的業務からは身を引きました。

思い出深い山手教会へ五十年ぶりに再び帰り、伝統あるこの教会の共同体の一員としてミサに与れる今日、この頃を深く感謝する毎日であります。

¶着物と私

渡邊 武尚

みなさまごきげんよろしゅうございます。２０２１年春に麹町教会より山手教会へ転籍し今年５月に堅信の秘跡を受けました渡邊武尚と申します。まだ不慣れなこともあり皆様にご迷惑おかけすることもあるかと存じますが、どうぞよろしくお願いいたします。

私の簡単な経歴ですが、大学卒業後、百貨店に就職。大学時代、サークル活動が山田流箏曲であったためか、配属は呉服売場。以後１５年ほど呉服売場に在籍し、売場マネージャーの経験も致しました。そんな私が当初配属された呉服売場では、人生の節目に纏うほとんどの着物を扱っていました。成人式の振袖や七五三の祝着、婚礼衣装、喪服などが思い浮かぶと思いますが、その他に「岩田帯」「宮まいり着」「長寿祝い(還暦など)のちゃんちゃんこ」「経帷子」などなど…

まさに“ゆりかごから墓場まで”の着物が揃います。 カトリックでは、なじみの薄いものもあると思いますが、『カトリック祈祷書　祈りの友』（発行所サンパウロ） では、「七五三のお祝い」、「成人の日のお祝い」などの祈祷文に加え、出産前の祝福「岩田帯の祝福」「人生の節目を迎える人への祝福」（厄年など）「元旦のお屠蘇の祝別」、「元旦の『初日の出』（御来光）を迎える祈り」… など、日本文化に寄り添った祈祷文が掲載されているところが大変興味深いと思います。

私は着物を着ると、自然と背筋が伸び、姿勢も良くなるため、フォーマルなシーンでは、なるべく着物を着るように心がけています。先日の堅信式でも着物を着てミサに出席しました。 ただ、着物を着ているだけで、どうしても良くも悪くも目立ってしまうということがあります。

山手教会で執り行われた母の葬儀ミサ・告別式の際も、弔問に来てくださる方々を黒紋付羽織袴姿で父と聖堂入口でお迎えしていたのですが、山手教会を観光散策中の方々に結婚式の親族と勘違いされ、“本日はおめでとうございます！！！”とお祝いの言葉を頂戴してしまったことがありました。これには私も父も苦笑い。でも葬儀のことで張り詰めていた緊張が少しほぐれた瞬間でもありました。

ところで、皆さまは“悉皆”（しっかい)という言葉を耳にしたことはありますでしょうか？

“悉皆”とは「ことごとく、すべて、残らず」を意味します。 かつては「悉皆屋」と呼ばれ、お客様や問屋からの注文を受けて着物の意匠のアイディアを出したり様々な職人に指示を出しながら仕事を調整する、いわば着物プロデューサーの役割をしていたそうです。そのことから、現在では一般的に着物メンテナンスに関係する一切を引き受ける仕事を指して“悉皆”と呼んでいます。

承る内容は、着物の生洗い、洗い張り、シミ抜きなどが大半ですが、サイズのお直し、色柄の染め足しや刺繍加工、色無地の染め替えなど多種多様です。着物は洋服と違い平面構成のため洗い張りをして接ぎ合わせると、一反の反物に戻ります。“良い着物は三代”（受け継がれる）とよく言われますが、確かに、結城紬のような真綿の着物は洗い張りをくり返し施すことにより、身体に馴染み、寄り添ってまいります。

また傷んできた着物は裏地を取り替えたり、天地替えをする。さらに袖なし羽織や帯などにリメイクをする。そして余った端裂はショールやバッグ、小物入れなどに仕立てる。正に、“悉皆”という言葉通りに「ことごとく、すべて、残らず」生地を無駄なく使い切り、新しい用途へと生まれ変わらせることができます。

私は呉服売場での経験を通して着物は日本人が永年培ってきた生活の知恵だと強く感じました。皆さまも、今一度、箪笥の中の着物を点検してみてはいかがでしょうか？

さてカトリック教会の中でも、纏うものは数多くあると存じます。その一つに、洗礼式での白衣があります。白衣は洗礼によって清められたことのシンボルであり、洗礼を受けてあらゆる罪がゆるされ新しい人として生まれ変わり、キリストのようになることを意味しているそうです。 また聖書には、

洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。(ガラテヤ 3・27)と書かれています。

私は、ミサに参加して、聖歌を歌い、ご聖体を拝領すると、日常生活の中で汚れてよれよれになってしまった心がまるで洗い張りされた布のように綺麗に生まれ変わり、清々しい気持ちになります。今現在、私は“キリストをぎこちなく着ている”姿だと思います。まずは、できる限りミサに参加して心の洗い張りをくり返し、少しずつキリストに寄り添う布のようになっていければ…と思っております。

このように、私の信仰生活は発展途上であり未熟です。これから皆さま方にお世話になる機会も増えるかと存じます。よろしくご指導いただければ幸いです。 ふつつか者ではございますが、どうぞよろしくお願い申しあげます。

¶ヨゼフ会活動報告（７月～９月）

毎週、主日ミサの会場案内等の奉仕を行いました。

・６月３０日（日）：ヨゼフ会総会

２０２０年１月以来、中断していた「ヨゼフ会総会」を教会ホールで開催、鈴木真主任司祭の挨拶に続き３８名の参加のもと、４年間の活動報告と今後の予定を報告しました。総会終了後、内藤神父様、会員間の旧交を温めるとともに新会員を交え、教会での活動について情報・意見交換を行いました。

・７月２１日（日）：聖書の分かち合い

６年ぶり聖書の分かち合いを開催、４７名の参加があり多くの新しい気づきを得ることができました。

・８月３日（土）：聖堂、教会ホールの大掃除

・８月１５日（木）：聖母被昇天ミサ奉仕

・９月２８日（土）：ヨゼフ会便り第５３号発行

¶ヨゼフ会活動予定（１０月～１２月）

・１１月２日（土）：帰天者のための追悼ミサ

昨年１０月から今年９月の間に帰天された方の追悼ミサをロザリオ会と共同で捧げます。

・１１月下旬：木曜パトロールの支援

毎年恒例の「木曜パトロール」活動支援のため、下着類を購入し提供する予定です。

・１２月２４日（火）：ヨゼフ会便り第５４号発行予定

・１２月２４日（火）：降誕祭ミサ奉仕

会場準備、案内、片付け等の奉仕を行います。

¶編集後記

「父の想い」ふと最近朝、目覚めて１３年前他界した父のことを思い起こしてみた。この歳になって遅いかもしれないけれど、あまり面と向かって話したことがないことに気づいたのだ。４人兄弟、長男でも次男でもなく三男、幸か不幸か、幸の方かもしれない、甘やかされて育ったのは事実だと思う。

父は茨城県栗橋出身、母は茨城県守谷出身で二人とも私と同じ末っ子、大正生まれで見合い結婚だったそうだ。もちろん父は戦争に行っているが昔のことは何も語らなかった。アルバムが一冊残っているだけだ。埼玉県川口から東京都赤羽に引っ越し母と４人の子供を育てた。公務員で黒電話があった。

時々夜酔っぱらって上機嫌で帰ってくると駅前の寿司屋で折詰を買ってきてくれた。いつも並寿司、母や兄姉たちは、赤身のマグロやいかのにぎり自分は干瓢巻きの海苔巻を二口食べるのが楽しみだった。

私は小さい頃から、あれを食べたい、何を買ってほしい、どこに行きたいなど両親に言ったことがなかったように思う。当然父とのエピソードも少ない。

そんなある日、小学生低学年の頃、父が私にだけ突然「航空ショー」に行こうといいだし、連れていってくれた。一番上の兄とは１０歳も離れていた。所沢だったか入間基地だった忘れてしまったが、なぜ私と「航空ショー」だったのか今もって不明だ。会場でめずらしく私がほしい素振りを見せたのか小さなガイドブックを買ってくれた。嬉しく本当に大事にしていたけれど、その後紛失してしまった。

いつも背広姿、文字は達筆、蕎麦好きで年賀状が楽しみ７０歳まで働き暮には自転車に乗り米屋で餅を買いに行き自ら切った餅を子供達に渡していた。

晩年父と母は二人で暮らし幸せだったのだろうか。いつも寝ているばかりなのに介護認定調査の時、胸を張っていたことが哀しい。私は心配ばかりかけて親孝行できたのだろうか。はなはだ自信がない。

地震、猛暑、豪雨の日々。けれど秋のささやき。「世はすべてこともなし」祈りのうちに。（坪井暢）